

〔研究ノート〕

フィールドワークにおける国際研究支援活動と 危機管理のあり方

—コロンビアのVIOLENCIAを乗り越えて—

木村光伸

はじめに

これはコロンビア共和国 Republica de Colombia のメタ県 Departamento de Meta 南西部に位置するマカレナ La Macarena における霊長類と熱帯林に関する調査報告、というよりは個人的な記録に近い。海外に拠点を設けて調査研究活動を実践する研究者にとって、とりわけそれが政情の不安定な国や地域であればなおさら、自らの周到な危機管理が求められる。一方で、その国や地域の中で相対立する勢力が相互に抗争を繰り返しているような場合には、外国人としての立場と研究者としての立場の合一が困難なことも少なくない。私はコロンビアの反政府勢力支配地域で長く野外調査を展開するチームの一員として滞在してきた(木村, 2011)。そしてそれは自らの人間性や人間行動の一般的な性向についての思惟のみならず、政治的立場や、発展途上国で活動する研究者としての責任を自覚させられる経験の連続でもあった。そのような研究活動の軌跡と交差するフィールド現場の実態を少しつまびらかにしておきたいというのがこの小論を記す動機である。もうひとつ、最近になって私は気になる書物に巡り合った。それも動機の一部にある。その本とは在コロンビア特命全権大使を務められた寺澤辰磨氏による『ビオレンシアの政治社会史—若き国コロンビアの悪魔払い』(寺澤,

2011) である。コロンビアという国はシモン・ボリヴァール Simon Bolivar が建国したグランコロンビア Gran Colombia 以来の分裂・独立の時代から、ずっと暴力的政治抗争が持続してきたといってもよい(伊高, 2003)。そのような歴史の中で、1960年代からマルクス・レーニン主義の政治的勢力が台頭してきた。その背景には侵略者 Conquistadores として植民を果たして以降の歴史を支配してきた有力家系に占有された寡頭政治体制に期待と不満を抱きつつ、自らは国家の庇護を受けることができなかった開拓農民組織の存在があり、いわば彼らの自警団的な活動があった。その歴史的な事実関係については、寺澤氏の著作によく取りまとめられている。それらの地域組織は反政府政治軍事組織(いわゆる反政府ゲリラ)となり、あるいはそのような組織と対極に位置する右翼的民兵組織 Paramilitar (パラミリタール) となってその間の抗争は現在もとどまるところがない(Kirk, 2003; Black, 2011)。しかし、そのような視点の延長上でのみ現在の反政府活動を理解しようとすると、ゲリラ組織すなわちテロ集団という構図しか浮かび上がってこない。コロンビアの現実社会の中で、ゲリラ組織がどのように住民と関わり、彼らの政治的主張を展開してきたのかを知るためには、政府や国軍の支配と庇護から離れたところに身を置いて実感するしかない。私たちの生態学的調査活動はそのような政

治的事態の中で実践されてきたのである。それは生命の危険と隣り合わせの生活の連続でありながら、豊かで複雑な自然の中で自然を守りつつ、自己の生活を何とか維持しようと苦闘する住民とのたおやかなる連帯の日々でもあったのだ。

すべての歴史には背景がある

ひとりの知人がアマゾン最上流域の熱帯雨林に消えて、彼は二度と帰ることがなかった。彼と最初に出会ったのはマカレナ村。1976年11月末のことであった。彼はアメリカ合衆国からやってきた植物学を専攻する大学院生というふれこみで、平和部隊US Peace Corpの一員としてマカレナ国立公園で調査を行うのだと言っていた。米国政府のお墨付きのせいか、彼はどこへいっても自信満々で、コロンビア自然資源庁INDERENAの国立自然公園マカレナ管理事務所などでも自由に振舞っているように見えた。他方の私といえば、ほとんど通じないスペイン語とあきれるほどにpoorな英語で、陽気だけでも事務作業の恐ろしく遅いコロンビア官僚たちとのやり取りで悪戦苦闘し、疲弊し尽くしていた。そんな中での出会いで数日をもに過ごし、私たちが雇ったカヌーでの2日間の船旅の後に、彼とは私たちの調査目的地の手前、グアジャベロ川とドゥダ川の分岐にあったINDERENAの調査小屋で別れた。そこにはやはりアメリカ合衆国の大学院生（あるいはPostdoctoral Fellowだったかもしれない）が2名滞在しており、小型哺乳類の調査その他に従事しているようであった。当時もいまま、中南米のスペイン語圏ではアメリカ人はGringo（ヤンキー的意味あいの用語である）と呼ばれて忌み嫌われる存在である。それは数少ない親米国

家コロンビアでも同様で、国家や経済人はアメリカ頼み（アメリカ支配ともいえる）であるから親米であらねばならないが、一般の国民とりわけ辺境に暮らす開拓民や先住民、奴隷として中南米に流入させられた黒人の子孫、あるいはそれらの混血によって生じた多くのコロンビア人にとっては、アメリカは経済的な意味であこがれの対象であるとともに自らの貧困の元凶そのものというイメージであったのだ。さて、川の分岐にある調査小屋で分かれて以来、彼の消息は不明である。地元の者たちの話では、彼はCIAのエージェントで共産主義ゲリラ組織に殺害されたのだ、ということであった。真偽のほどは確認できていない。それでもドゥダ川の流れも、辺境マカレナの住民たちの暮らしにも変化はなかった。それがマカレナと私の歴史（木村，2011）の始まりである。

私はその年の10月中旬からコロンビアの首都ボゴタ市Ciudad de Bogotáに滞在していた。生まれて初めての海外旅行であり、それまで飛行機に乗ったことさえなかった。26歳、フィールドワーカーのスタートとしては決して遅くもなかったけれど、恥を恥とも思わないほどの冒険野郎的な若造の時代はとっくに過ぎていて、海外での活動者としての分別を發揮しなければならない立場でもあった。すでに1971年度から3次にわたる活動を終えていた日本モンキーセンター・アマゾン学術調査隊の後継調査として、日本での準備活動でもっとも肝心要であった在日本コロンビア大使館（領事部）との交渉、具体的にはコロンビアにおける野生霊長類を中心としたアマゾン・オリノコ流域の生態学的長期調査を目的とした調査許可の取得とそのための正式な入国ビザを求めた交渉は進展を見ないままに時間切れとなって、私はビザなしでコロンビアに入国し、東京の大

使館経由でコロンビア本国に送達されているはずの書類を、ボゴタの大統領府治安局DASや自然資源庁INDERENAで見つけ出して私たちの現地調査を開始しなければならない使命を背負っていた。ボゴタ市では、いつ解決するとも知れない正式な滞在査証の取得と外国人がほとんど踏み入ったことのないコロンビア中部の熱帯森林地帯での調査許可を待ちつつ、*Buenos días*（おはよう）と*Graias*（ありがとう）以外は、役所の部屋を出る度に、すでに顔馴染みとなっていた美人の秘書嬢に必ず言われる*Hasta mañana!*（また明日ね!）という用法を覚え、滞在していた安ホテルの隣の飯屋では*Una Cerveza, Por favor*（ビールを一杯下さい）くらいの単語だけを駆使して生活していた。辛かったけれど、この時期に、私はコロンビアの下町暮らしの人々の生活を垣間見ることができてよかったと、いまでも本気でそう思っている。そこに私の海外調査における立ち位置の原点があったようにも感じるのである。

同行していた先輩の調査隊長がどんな手を使ったのかは知らないけれど、ようやくのことで調査許可が下り、それに合わせたビザを取得することができた時には、予定されていた調査期間のすでに3分の1が過ぎようとしていた。

ここで話は変わるが、私は1968年に大学生となり、1年足らずで全学ストライキに突入した京都大学のキャンパスで過ごしたので、いわゆる大学紛争世代、悪くいえば（よくいっても同じだが）世でいうところの暴力学生の一步手前にいた。本当はナイーブな心性の持ち主であったのだけれど、いまとなってはもうどうでもよいことだ。ただ当時の私は、精神的にも肉体的にもひ弱なインテリが独り善がりの世界観を人民大衆に押しつけるような社会のあり方を嫌悪していたし、同時にいわゆる大学解体、講

座制度の改革を叫んでいた若手研究者が次々と職を得て、あるいは博士号を得て、飼いか猫化することにも言いようのない絶望を感じていた。だから大学院進学を拒絶して無給の財団法人日本モンキーセンター研修員などという将来に希望を繋ぐことができないところに身を置いたのであった。それでも飼いか猫はまだまじだったのかもしれない。彼らの多くが次世代の研究者業界の支配者になっていったのだから。そんな私の経験がコロンビアにおける個人的な体験と直接関係するわけではないが、あらゆる意味での闘争を見る私の視点のどこかにずっと引っかかってきたこともまた事実であろう。

1970年代のコロンビアは軍政が終わって民主的勢力が大いに自己主張を始めていた時代であったから、ボゴタ市とりわけ行政機関が集中している旧市街地（Centro、セントロつまり中心街の意）ではようやく一時の自由を得た革新系のデモ行進などが毎日のように繰り返られていた。セントロの安宿の窓辺には遠くから近付いてくるデモ隊の陽気なシュプレヒコールが日に何度も聞こえていた。そこで展望もないままに役所へ日参する無駄な時間以外には毎日することのない私は、機会があればデモ隊を見物に行き、そのうちに何人かの学生と顔見知りになった。コロンビア国立大学Universidad Nacional de Colombiaの学生たちは知的好奇心が旺盛で学力も高く、しかし貧しい階層の出身者が少なくなかった。したがって当然のように共産主義の信奉者あるいは賛同者となり、一部特権階級（それも植民地成立以来の限られたエリート家族集団）が独占するような民政ではなくて真の民主主義政府の樹立と同時にコロンビア人民が内外において政治的経済的に主体的な権利を獲得することを目指していた。当時のコロンビアは本当に物質的に貧しい国であっ

た。ボゴタ市の中心街では広大な俗にドロボウ市と呼称されるマーケット（盗品でも密輸品でもすぐに壊れるような品物でよければどんな物でも手に入れることができた）が繁盛し、しかしまともなマーケットでは電化製品はおろか、プラスチック容器やビニール袋さえも調達が困難で、私たちの調査隊は日用品の大半を膨大な別送貨物で現地に運び込んでいた。コロンビアは世界でも有数のコーヒー生産国であり、現在では日本でも名の通った高級ブランド品であるが、生産国コロンビアの住民は一級品のコーヒーなどには出会うこともできず、現地の裕福な家庭に招かれた際には「どうぞ上等のネスカフェを召し上がれ」といってインスタント・コーヒーを頂戴したくらいであった。その代り、首都のボゴタ市でも近郊から運ばれてくる地鶏が市街の至るところの店では炭火で大量にローストされていて、市民は丸ごとであったり、半羽であったり、4分の1羽であったり、好みと懐具合に応じて、その美味に与っていた。コロンビアの貧困と栄光が育んだ偉大な作家ガルシア・マルケス Gabriel Garcia Marques の「百年の孤独」は1967年の作品であるが、そこに描かれている荒唐無稽な生活の原型は海の彼方からやってきた侵略者たち Conquistadores による民族文化の破壊と殺戮、それによってもたらされた在来の文化風土の荒廃と住民の非モラル化を象徴している。1976年に私が初めて出会ったマカレナ上流域の住民たちの多くは、他のコロンビア非都市部の住民と同様に、ガルシア・マルケスが描くような素朴とも見え、かつ常軌を逸した共同体の住民のようでもあったのだが、少なくとも近代国家の庇護のもとに生きているように見えなかったことも事実である。

コロンビアの政治状況と国際共同研究

コロンビアにおける私たちの調査活動は1971年の日本モンキーセンター・第1次アマゾン学術調査隊（代表：伊澤紘生日本モンキーセンター専任研究員、当時の文部省科学研究費の補助による）に始まった。その後、1975年度末まで3次の調査隊を派遣し、私は後方部隊として現地から送られてきた資料の整理やサルの内容物の検索（食性の調査：当時は新世界のサルのことなど何もわかっていないに等しかった）などの手伝いをしながら、見たこともないアマゾンに想いを馳せていた。その後、アマゾン研究の対象は化石種の発掘などに拡大して調査の主体は京都大学霊長類研究所が担うこととなった。生態研究の部分はアマゾン本流北部のカケタ川 Rio Caquetá 流域での調査が続行できなくなり、マカレナで展開されることとなった。同時にペルー、ボリビアなどの熱帯林へも進出したが、それも数年で終了となった。要するに生態学的分野ではマカレナ調査地だけをわずかな陣容で維持する体制が出来上がったのである。1976年に私が調査に出ることができたのは日本の霊長類研究の曲がり角で生じたちょっとした事故のようなものであった。そしてマカレナはその後の10年間にわたって放棄された（木村, 2011）。

私たちのグループがマカレナに戻ったのは1986年のことで、当時すでに宮城教育大学に移籍していた伊澤紘生教授が、ボゴタ市のロスアンデス大学 Universidad de los Andes との共同プロジェクトとしてキャンプを再生し、マカレナ霊長類研究センター CIPM : Centro de Investigaciones Primatológicas Macarena（のちにマカレナ生態学研究センター CIEM）の活動をスタートさせた。翌年、私も名古屋学院大

学の長期研修の機会を得て1987年10月に調査地に合流し、その後2002年9月まで継続的な研究基地機能を維持させてきた。この間の研究事情についてはすでに報告済みである（木村，2011）。

第二次世界大戦後、日本の海外調査活動は、マナスル登頂、南極調査、アフリカにおける類人猿研究など、探検的要素の強いものであったが、少なくとも戦前の植民地経営戦略の補完や軍事的意味合いの強い地政学的基礎研究などの弊害は取り払われ、科学的要請とともにロマンの漂うものでもあった。探検大学を自認する京都大学では少なくとも1980年代半ばまではそうであったと思う。

それでもコロンビアでは私たちの調査の意図や意義が理解されなかったり、しばしば曲解されたりで、調査がスムーズに進むことは困難であった。1976年度の調査では先述のように許可を得ることすら困難な状況であったが、いざ許可が下りて調査地に出発するに際しても、INDERENAの若手職員が同行することを義務づけられた。その職員サンプルSamper氏はどうやらエリートのアームチェア生態学者の官僚であったようで、調査メンバーとしては何も貢献しなかったけれど、伊澤、木村とともに共著論文（Izawa, Kimura and Samper Nieto, 1979）に名を連ねて実績を上げた。彼は要するにわれわれの監視役であったのだ。なんといってもINDERENAはINSTITUTO（英語のINSTITUTEと同語）とはいうものの実際には役所そのものだった。そういうわけで日本の調査隊とコロンビアの研究機関の間での交流は個人的なレベルにとどまらざるを得なかったのである。その間にもコロンビアの熱帯森林は政府に奨励された開発計画の下で農場や牧場に転換されるところが増加し、生物多様性の保全どこ



図1. 開発されて裸地の目立つメタ県中西部地域。

ろか森林の存続すら危うくなる地域が少なくなかった。

1986年に再開されたマカレナ調査では共同研究者としてカルロス・メヒア Carlos A. Mejia 教授が選ばれた。彼はコロンビアを代表する生態学者であり、かつてドイツのマックス・プランク行動学研究所 Max Planck Institut で学び、アフリカでキリンの生態研究に従事するなどの業績を持つ優れた若手教授であった。彼の所属するロスアンデス大学 Universidad de los Andes（通称 Uniandes）はコロンビアにおける名門私立大学のひとつであり、小規模ながらも理学部に生物学科があった。といっても施設は貧弱で研究資金は乏しく、学生の実習などの費用にも苦勞をしていた。われわれは Uniandes の学生たちの研究サポートとして、調査地への旅費や滞在費を負担し、卒業生が海外の大学院へ留学するための研究実績を積む支援をしてきた。そこから育った数名の学生が、米国の有力大学で博士号を得て、いまではコロンビアを代表する研究者となっている。

マカレナ調査地には日本人の調査小屋とコロンビア人学生の施設があり、調査路でつながっていた。1993年になって日本の民間支援

によって教育施設も設置された。いずれも自力で建てた掘立小屋でしかなかったが、その全体はドゥダ川に沿っておよそ8kmのテリトリーを確保するに到り、コロンビアを代表する調査基地として存在が知られるようになっていった(Nishimura, 1995)。ここを調査拠点として熱帯林研究や霊長類研究そして熱帯林の自然体験を遂行した日本人は大学院生や学部生を含めると30名を超える数である。1990年に名古屋で開催された国際霊長類学会では会場のあちこちでスペイン語が飛び交い、マカレナスクールの勢いは大きかった。そのような刺激はしかし日本では飛躍的に展開することがなく、むしろ前述のようにコロンビアに霊長類学や生態学のたくさんの種を播くこととなった。

マカレナ調査地が再開された1986年からの数年間は、ある意味ではコロンビアの民主化の時期でもあった。1984年には反政府勢力の合法政党組織が生まれ、愛国同盟Union Patriótica (UP)と名付けられた。UPは国政進出とともに大統領候補の擁立を企図したが、多くの候補者が暗殺されるなど国内の混乱は拡大の一途をたどり、同時にゲリラ活動も収束する気配はなく、反政府勢力のコロンビア革命軍FARCは1994年には再び非合法部隊のゲリラ活動に専心することとなった。反政府活動の中で最大勢力であったFARCの体制や活動は多くの資料によって知ることができる(Vanegas, 2009; Leech, 2011など)。この間、別のゲリラ組織であるM-19(4月19日運動)は最高裁判所襲撃・占拠事件(1985)などで首都に打撃を与え、国民戦線ELNの経済インフラ攻撃(石油パイプラインや送電鉄塔の破壊工作など)は、さらに政府軍の攻勢を招く端緒を開くなど、コロンビア国内の治安状況は1984年からの10年間で極端に悪化した。首都を中心に爆弾テロ、

要人の暗殺、誘拐が頻発し、それに誘発されるように一般犯罪も増加し、市民生活はつねに危険と隣り合わせにならざるを得なかった。コロンビア人成年男子の死亡原因のトップに殺人が挙げられたのもこのころのことである。このような状況の中で日本=コロンビア共同事業 Proyecto Colombo-Japonésとしての生物学研究チームは独自の活動を継続していったのである。

マカレナの政治・軍事的位置

コロンビアは総面積100万km²(日本のおよそ3倍)の国土を持つ大きな国である。全体の地形は大きく3タイプに分けられる。ひとつはアンデス造山帯でコロンビアではアンデス山脈Sierania de los Andesは西・中・東の3列に連なる山系からなり、首都ボゴタ市は東アンデスの中央に位置している。アンデスの東部にはアマゾン流域Amazonasとオリノコ流域Orinoquiaが広がり、広大な熱帯雨林とその中を網の目状に分流する河川が水と緑の世界を展開している。それ以外にコロンビア中東北部に



図2. オオアリクイは熱帯雨林にも熱帯草原にも生息する大型の哺乳類であり、その生物多様性のひとつの指標でもある。

はジャノス Llanos と呼称される熱帯乾燥地帯が広がっていて、疎らな草原と河畔林はいまや大規模粗放牧畜の一大拠点としてコロンビアの食糧と経済を支えている。

コロンビアの国土の地理的な中心に位置するのがメタ県 Departamento de Meta である。その政治経済の中心地はビジャビセンシオ Villavicencio 市であり、国内線の空港とコロンビア空軍の巨大な基地が配置されている。ほかに陸軍の司令部も置かれ、ここから東部のブラジル、ベネズエラ国境へ至る広大な空白地域の入り口でもある。メタ県には整備された自動車道が乏しく、交通を補完するのはビジャビセンシオからの航空路に頼るか、アマゾン、オリノコ両河川の下流から長大な迂回を経て目的地にたどりつくほかはなかった。航空路といっても小型の目視に頼るようなチャーター機が大半で、船旅も急流を遡上するのに耐える程度の小型船舶しか利用できなかった。したがってメタ県では都市間、村間あるいは集落間の頻繁かつ経済的な人的交流は困難であり、それぞれが半孤立的に流域経済圏を構成するに過ぎなかった。もっともどういうわけか情報の伝達速度だけは恐ろしく速かった。したがって私たちの動向はいたるところへ筒抜けであるといってもよかった。

マカレナ市の例をあげてこのことを検証しておこう。

マカレナ市は統計上の人口が2万人でメタ県南西部の拠点のひとつである。マカレナの中心的集落はオリノコ川の上流河川であるグァジャベロ川 Rio Gayabero の南側に沿った人口がおよそ3000人の小さな集落に過ぎない。この町に至る道路はなく、現在も乾季の一時期にのみアマゾン川支流のカケタ川 Rio Caquetá 流域、アンデス直下の小さな町サンビセンテ・デル・



図3. マカレナ市とコロンビア全土をつなぐ唯一の滑走路。その上部に展開するのはコロンビア軍駐屯地。



図4. 週2-3便の定期飛行機便などには旅客のほか、日用品・衣料品・農産物・新聞雑誌などありとあらゆる物資が運び込まれ、ここからは生きた牛、鶏、トウモロコシ、川魚（とくに巨大なナマズなど）がビジャビセンシオへと輸送される。1990年頃から旅客専用の便もでき、また個人チャーターの単発機や双発機も需要に応じて飛来するが、いずれも現地の天候に左右され、実際に到着するまでは不確かな無線情報しか入手できない。この写真は1976年当時の様子だが、この1940年代製造のDC-3型機は2012年現在も現役で就航している。

カグワン San Vicente del Caguán から悪路を10時間くらいかけて到達できるに過ぎない。物資の大半は急流を超えて遡上する小型の船で下流

から航送され、一部は航空機の輸送に頼っている。さらに複雑に分流する河川に沿って開拓的入植者の家族が分散居住し、無秩序な開発に拍車をかけるとともに、有用樹種を狙う不法伐採やコカあるいはマリファナの密植など、国立公園に指定された地域の中に多くの無法状態を生じさせているが、これを取り締まる機能に著しくかけているのが実情である。マカレナには警察隊 Policia Ncional が常駐し、軍の検問や取り締りも行われてはいるものの、実態はゲリラやその賛同者と不法伐採業者や麻薬業者との区別さえ判然とはしない。ただし、これらは都市部在住のコロンビア人から見た印象であって、現地に滞在すれば、もう少し事態が明確に見えてくる。

マカレナでは1984年頃からFARCの間接支配が長期にわたって続いてきた。1994年にFARCが再び軍事路線に立ち戻るまで、マカレナ市長は革新派が独占し、その後も反政府系の直接的支配は表面化しないものの、町を一步出れば軍や警察の力が及ばない政治空白地帯であった。ただし、この間も私たちの調査拠点のあるドゥダ川流域はFARCによる直接的な制圧地帯であり、彼らとの協調なしに調査活動を継続することなど不可能であった。もっとも、すべての住民が反政府の勢力を支援していたわけではない。とくに1990年前後にはマカレナを自然探訪の場として観光化しようとする計画も実行段階に入り、ビジャビセンシオからのジェット便、マカレナ滞在費、観光ガイド費用などをセットにした試みも行われ、町から数時間程度の熱帯林ツアー（いわゆるエコツアー）にやってくる外来者も見受けられるようになっていた。この頃には旧ソ連から流れてきた双発ジェットエンジンの軍用貨物機がチャーター便として就航し、速かったけれど、本当に危険な

乗り物として何度も恐怖を体験させられた。そのエコツアー客の受け入れを精力的に行っていたのは不定期航空便の手配や貨物の移送などを一手に請け負っている一家であった。この家族はゲジャベロ川上流のラウダール Raudar（川の両岸に岩がせり出し、水量が多すぎても少なすぎてもカヌーの通過ができなくなる難所であり、景観がエコツアーの客に喜ばれた）と通称される景観地にも牧場と宿泊施設を持ち、観光客のサービスで独占的に収益を得ていた。しかし独占は妬みを誘い、恨みを買うこととなる。この家族の多くが、ゲリラの拉致と思われる事件ののちに殺害されたもようである。マカレナでは経済的利益を独占することが許容されないものであった。それはFARCの基本理念である住民の共産主義的共生に反する者は認めないという強固な意志表示でもあったのである。またマカレナの町から調査基地へ行く川沿いの大半の住民はFARCに何らかの便宜供与（税とか現物の供出、あるいは労力の提供など）を強制あるいは指導されており、河岸には武装したゲリラ兵による監視所があった。

一方で、ドゥダ川流域では1991年を中心に国軍によるゲリラ掃討作戦が実施され、私たちが雇用している現地人助手がカヌーによるキャンプ物資運搬中に航空機からの威嚇攻撃を受けたり、調査基地に軍の戦略ヘリコプターが強行着陸して短期間駐屯したりという危険な状態もあった。私自身も調査基地（ゲリラ基地と誤認されないようにトタン屋根に大きくCIPMとペンキ書きされている）を上空から機銃で狙われたことがあり、ただちにマカレナの町に駐留する政府軍司令官と直接交渉したが埒があかなかった。そのような軍事衝突に巻き込まれる危険性を認識したうえで、私たちの調査地は維持され続けた。

マカレナは反政府活動のシンボルであると同時に FARC にとっては実戦的な意味で軍事拠点のひとつであったのだ。

政治的に不安定な地域における研究体制の維持と危機管理

コロンビアのように国土全体が反政府活動の主戦場となる可能性がある場合には、研究調査候補地の選定が非常に困難である。一般に野生生物を対象とした生態学的な研究を行う調査地は、①自然環境がよく保全されている、②対象地域を生活の場としている住民ができるだけ少数であり、また協力的である、③拠点となる都市との交通の利便性が高い、④生活物資の供給が可能である、⑤研究を阻害されるような地域的課題が少ない、⑥当該国や国際的な規模の研究機関のサポートが得られやすい、⑨治安条件が極端に悪くない、などの条件を勘案して設定される。とはいえこのような条件をすべて満たすような土地は、すでに自然保護地域として国立公園その他の法的保護のもとにある場合が大半であろう。あるいは規模の大きな国家的あるいは国際共同による調査プロジェクトの対象としてすでに研究活動が遂行中である場合が少なくない。したがって調査研究の処女地を新たに開拓することは至難の業であるといってもよいだろう。

私たちのプロジェクトは、以前から「陸のガラバゴス」などという異名を有するマカレナ山塊の西方をターゲットとして企画された。マカレナ山塊は東アンデス山脈の東方に孤立する巨大なテーブルマウンテンであるが、アンデスの隆起に対応して西が高く東方へなだらかな傾斜を持ち、東はオリノコ源流の熱帯林へと連なる。山塊の西はグァジャベロ川が侵食した絶壁

となっている。私たちが調査地を設定したドゥダ川はグァジャベロ川の支流で蛇行しつつ北流し、その上流は渇水期には通行が困難になり、さらに奥へ抜ければビジャビセンシオから南下する悪路の終点に到達する。したがって通常の人的通行はきわめて稀であり、それはそのままゲリラ部隊の拠点とする要件を十分に備えている。チェ・ゲバラ Che Guevara が最後の山岳戦を戦ったボリビアの山中はこれよりももっと農民の多い開けた場所だった。私たちがここを調査地とした主な理由として、①若干とはいえ過去のデータが参照できること (Defler, 2004 などを参照)、②地元に INDERENA の事務所があること (実際には実務的な役には立たなかったが、政府側の保証を取り付けるという意味では有用であった)、③マカレナに注意を向けるコロンビア人研究者が生物学以外にも存在 (たとえば植民・移住などを専門とする社会学者、地史や地形学を専門とする地質学者、先住民の歴史遺産に注目する人類学者など) することなどが挙げられる。ただし調査地における日常生活は、ほぼ現地の入植農民と同様のレベルになることも覚悟をしなければならなかった。

1970 年代の調査地では野生鳥獣の捕殺が行われていた。その一部は標本となり、残りは貴重な食料として保存された。しかし管理ができていないとはいえ国立公園内であり、これから保全理念とその実践活動を住民にも普及させていこうとする立場の調査グループが農民と同様の行為を続けることは研究背景となる思想の自殺行為でもあり、若干の制限 (INDERENA の熱帯淡水域における水産資源保護の基準) を加味した魚類の捕獲以外の動物への狩猟圧を全面的に否定することとなった。

私たちの調査研究は地域に住む住民の生活安定に対して何某か寄与することを暗黙の条件と

していた。もちろんそのような公式の取り決めがあったわけではないが、医療支援、急流を陸路で超えるための道路確保、小学校建設、住民移動の手助けなどの要望が、役場や住民代表の手でまとめられ、日本政府へのメッセージとして私たちに託されることが少なくなかった。その中には日本の民間支援を得て実現にこぎつけたものや当時の国際協力事業団JICAの支援活動、あるいは専門家や青年海外協力隊JOCVの派遣という形で結果を得たものなどが少なからずあり、一定の成果があったと考えられる。ただし、そのような支援活動はつねに両刃の剣であって、援助の恩恵を被ったものとそうでない者の間に確執を生み、また経済支援の専門家ではない生態学研究者にとって過重な要求にエスカレートすることも懸念された（Kimura, 1991）。何よりもこの問題の根本には、日本政府の外交の手が首都ボゴタ市の外にはほとんど及ぶことができなかったという治安上の問題が横たわっている。私たちの調査地にもJICAの専門家がわずかな期間に滞在したが、青年海外協力隊の隊員すら安全に常駐することは困難であり、大使館員の訪問も何度か企画されたが正式に実現したことはなかった。したがってメタ県でもっとも反政府勢力の活動が活発なマカレナ周辺からの情報は私たちが慎重に発信するもの以外にはほとんどない状況だったのである。

私たち日本人研究者も可能な限り交替で通年の滞在を目標としたが、メンバーはそれぞれ日本の大学に所属し、学部教育に多大の時間を割かれる（1990年代以降は研究主体の大学院大学以外の教員は長期在外調査に参加することが著しく困難になっていった）ような現実の中では、キャンプ運営を現地スタッフに依存する比率が徐々に高くならざるを得なかった。それは私たちが得る正しい情報の急激な不足を意味し

ていたのである。

2002年9月から10月にかけて私たちが遭遇し、12月までその解決に奔走させられた反政府組織による日本人研究者の拘束というイベントは、上記のような困難な状況が生み出した結果であると、私は分析している。

私たちの調査地はすでに詳述したような複雑な政治的状況下にあって、調査活動の遂行は、事実上FARCの協力なしには成立しえないものであった。FARCの兵士たちはもともと規律正しく構成され（こういう評価自体が反政府的な見解であるとして問題視される可能性が高いが、少なくとも私はFARCの同調者ではない）ており、不定期に私たちのキャンプを訪問した時も原則的にはキャンプ内で宿泊や食事をするのではなく、河岸（playa、海岸の砂浜を意味するスペイン語であるが、中南米の大河流域では河岸の砂浜などを指す）に天幕などを張って一夜を過ごすのが常であった。また物品の要求なども控えめで、私たちが彼らの要求には十分応えることはなかった。ただしそのような平静な交流を通して日本人調査グループの滞在意図と現地に対する利益の供与については必要に応じて意見交換がなされていた。そういう暗黙の了解のもとで私たちの安全は保障されていたといってよいだろう。軍事的緊張が強くなく、かつFARC書記局の統制が十分に効果的な場合には、ゲリラはきわめて規律的であり、私たちがとの対話は十分に可能であった。もちろんそれは危険な賭けでもあったのだが。

調和と破綻

私たちと反政府組織との間の奇妙な友情関係はゲリラ組織の戦略とうまく合致した場合のみ有効であり、それは私たちとの一時的な利害

の一致ということに過ぎない。コロンビア政府の誤った政治判断による一時的なゲリラ自治区容認の後、2002年に入ると、とくに国軍の強力な攻撃にさらされ、また資金源を断られた状況では、FARCにも地域保全や住民の保護という闘争の理念に沿った活動はなしえないものとなり、それは私たちとの必然的な決別でもあった。FARCの戦闘部隊は地域ごとの師団に分割されて全体を書記局が掌握していたが、その連携・指導が徐々に崩れると、地域との一体性や住民の生活保障などは雲散霧消し、ともすれば暴力的行動のみが残存する非和解的孤立組織とならざるを得なかったのであろう (Betancourt, 2001, 2009)。情報を得るすべをすでに失っていた私たちのグループは、そのような状況に飲み込まれてしまったのである。ゲリラによる拘束という不測の事態を回避することができず、私たちは長期間、苦難の日々を送らなければならなかった。

私たちを拘束した組織がFARCの書記局に指導されたものかどうかは現在もなおつまびらかではないが、そのような危険性は当初から十分に予見されたものでもあり、そのようなリスクをすべて考慮するなら、現地調査そのものが成り立たないということにもなる。調査者やそれに協力してくれる現地スタッフと地域の人々の安全を確保しつつ、相対立する勢力の微妙なバランスの狭間で、自らの危機管理を保障することを前提にして、研究は遂行されねばならない。その見極めのポイントは如何に現地事情に精通し、研究者自身が現地に溶け込んだ生活を構築できるかにかかっている。とはいえ「言うは易し、行うは難し」である。

2012年10月の時点でコロンビア政府とFARCの全面和平に向けた交渉が再び進展しはじめた。しかし、これまで何度も失敗をくり返

してきた道筋を今回もたどる可能性が大きい。南米諸国の政治状況が反米一辺倒から、少しずつ変化するきざしを見せている現在、まだまだ親米国家コロンビアの先き行きは不透明である。私たちのマカレナ帰還の日は遠い。

文 献

- Betancourt, I., 2001. *La Rage au Cœur*. XO Éditions, Paris. 永田千奈訳『それでも私は腐敗と闘う』草思社 (2002).
- , 2008. *Letters to My Mother: A Message of Love, A Plea for Freedom*. 三好信子訳『ママンへの手紙—コロンビアのジャングルに囚われて』新陽社 (2009).
- Black, J. K., 2011. *Latin America: Its Problems and Its Promise*. (Fifth Edition). Westview Press, Boulder.
- Defler, T. R., 2004. *Primates of Colombia*. Tropical Field Guide Series. Conservation International, Washington D. C., printed at Bogota D. E., Colombia.
- 伊高浩昭, 2003. コロンビア内戦—ゲリラと麻薬と殺戮と一. 論創社.
- Izawa, K., K. Kimura and Samper Nieto, 1979. Grouping of the wild spider monkey. *Primates*, 20: 503–512.
- Leech, G., 2011. *The FARC: The Longest Insurgency*. Zed Books, London & New York.
- Kimura, K., 1991. *Conservación y desarrollo de La Macarena*. Presentation on 'Reunión para Futuro de La Macarena'. La Macarena office, INDERENA and Asociación de la Macarena.
- 木村光伸, 2011. コロンビア・マカレナ調査地とアマゾン熱帯林研究—長期にわたる定点調査の意味と限界, そして将来—。名古屋学院大学論集 (人文・自然科学篇), 48(2): 107–118.
- Kirk, R., 2003. *More Terrible than Death: Violence, Drugs, and America's War in Colombia*. Public Affairs, New York.

Nishimura, A., K. Izawa and K. Kimura, 1995.

Long-term studies of primates at La Macarena,

Colombia. *Primates Conservation*, 16: 7-14.

寺澤辰磨, 2011. ビオレンシアの政治社会史—若き

国コロンビアの悪魔払い—. アジア経済研究所,

IDE-JETRO.

Vanegas, R. G., 2009. *The FARC Revolutionist*.

Xlibris Corporation, USA.